

4. 冬季調査

1. 調査概要

新潟市域におけるカラスの生息状況・生息数を把握するために冬季に罫調査を実施した。

(1) 調査時期

カラスは繁殖期は番(つがい)で行動し、繁殖・育雛を終えると次第に集団を形成するようになる。秋季になると越冬に渡来したミヤマガラス、コクマルガラスも加えて、特定の場所に集団罫を形成する。このことから、冬季に罫に集まるカラスの個体数を観察・カウントすることにより、新潟市域におけるカラスの生息数の概数を把握することとした。

冬季調査は、こうした冬罫の時期に当たる12月～1月に実施した。個体数のカウントは一斉調査によることが望ましいが、調査範囲(新潟市域)が広域にわたることや、事前に罫位置の確認が必要なことから、行政区ごと、罫ごとの調査となった。

(2) 調査区域

平成14・15年度の調査では①北区松浜・太夫浜の三菱ガス化学の構内、②関屋～青山の海岸林、③新潟大学五十嵐キャンパスの松林が旧新潟市域における主要な罫として確認されている。

これらの罫の現状を確認するとともに、新たに新潟市域となった秋葉区や南区、西蒲区の罫の確認にも努め、確認できた主要な罫について個体数調査を実施した。

(3) 調査方法

調査範囲が広域にわたることから、現地調査はいがた野鳥の会(平成14年度、平成15年度のカラス調査を実施)の有志の方々の協力を得て実施した。各行政区ごとに担当者を定め、事前に罫位置の予察確認を行うとともに、12月の条件のよい日の夕刻(16:00～17:00頃)、罫に集まるカラスの数をカウントした。

2. 埒の確認

冬季(埒)調査は、埒の位置を特定する必要があることから平成14・15年度の調査結果やその他の既存資料、事前の現地確認踏査により埒の確認に努めた。確認できた主要な埒は表4-1のとおりである。

表4-1 確認された埒

区	埒地点		埒の状況		平成14・15年度調査	備考
北区	松浜町	三菱ガス化学構内		12月3日以降、埒としての利用がなくなった	ハシブトガラス:800羽、ハシボソガラス:1,320羽、ミヤマガラス1,300羽	11月6日まではミヤマガラス300羽、ハシブトガラス数羽、ハシボソガラス30羽の埒入りを確認
東区	じゅんさい池公園		○	12月18日・19日・23日、ハシブト・ハシボソ・ミヤマの混群300羽程度の集結を確認	埒の記録なし	
中央区	関屋海岸林	日本歯科大学、浜浦小学校付近の海岸林	○	ミヤマガラスを中心に5,000羽規模の埒	ミヤマガラス:700羽	
江南区	埒、確認できず				調査対象外	
秋葉区	東島	新潟市バイオリサーチセンター、新潟薬科大学付近	○	ミヤマガラスを中心に5,000羽規模の埒	調査対象外	
南区	埒、確認できず				調査対象外	
西区	青山海岸林	青山6付近の海岸林		現在は埒としての利用なし	ミヤマガラス300羽	12月6日15:00~16:15カラス確認できず。関屋方面に向う上空通過を確認。
	新潟大学五十嵐キャンパス内		○	ミヤマガラスを中心に5,000羽規模の埒	ミヤマガラス1,500羽	平成14・15年当時、埒であった大学正門脇のマツ林が伐採されたため、北側のマツ林に移動。
西蒲区	舟戸	三根山藩址のスギ林	○	ハシブトガラス・ハシボソガラスの2,000羽規模の埒	調査対象外	

平成14・15年度の調査の際に3,500羽規模の埒であった北区松浜町の三菱ガス化学構内は、11月6日までミヤマガラスを中心に300羽程度の埒として利用されていることが確認されていたが、12月3日の調査ではカラスの一時集結や埒入りは見られず、以後、埒としての利用はなされなくなった。

一方、東区のじゅんさい池公園では、ハシブトガラス・ハシボソガラス・ミヤマガラスが300羽程度集まる様子が観察され、埒としての利用が確認された。

関屋海岸林及び青山海岸林は、平成14・15年度の調査時には1,000羽規模の埒として記録されているが、今期は青山海岸林ではカラスの集結は見られず、規模の大きな集団埒としての利用はなされなかったようである。

新潟大学五十嵐キャンパスは、平成21年の12月に、それまでミヤマガラスの埒となっていた正門脇のマツ林が伐採されたが、教育学部棟近くのマツ林に埒を移し、今期も5,000羽規模の埒となった。

秋葉区東島の新潟市バイオリサーチセンター付近と西蒲区舟戸の三根山藩址のスギ林の埒は今回の調査で確認されたものであり、特に新潟市バイオリサーチセンター付近はミヤマガラスの5,000羽規模の埒となっているようである。

3. カラスの生息分布

埒の確認調査の一環として、広く新潟市域を踏査しカラスの生息分布状況を調査した。現地踏査はハンディGPS(GARMIN社、etrexVENTURE HC)を携帯して市内各所を車で移動しカラスの群を発見した場合にはその位置をGPSで記録し、時刻、群の規模(羽数)を記録した。現地確認踏査は、12月1日～1月10日の間に、短時間の観察も含め、12回実施した(付表2)。

図4-1はその踏査によるGPS軌跡を示したものである。

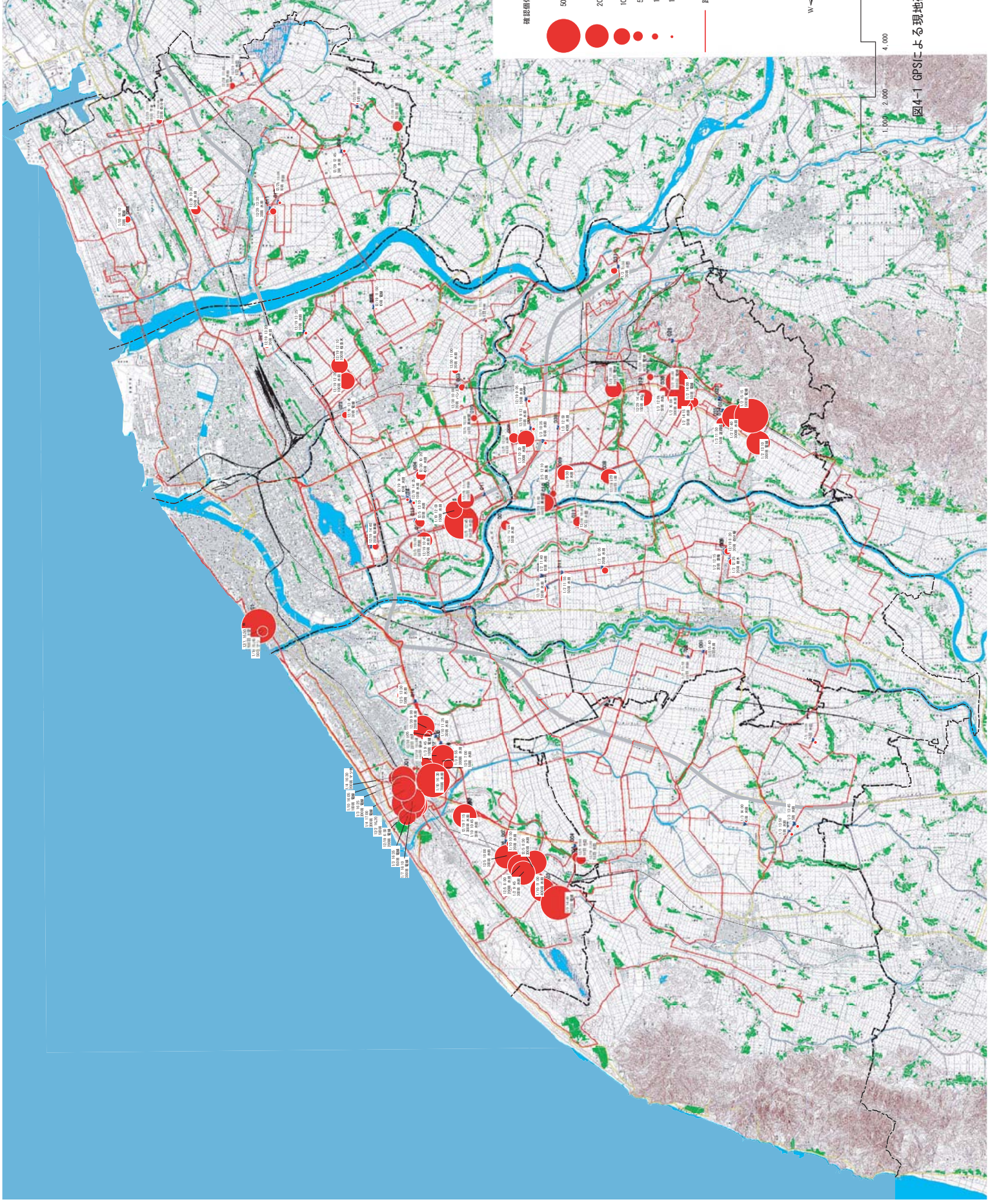
この現地確認踏査を通じてカラスの大きな群がよくみられた区域は、①西区新通付近の水田、②西区田島・早潟付近の水田、③江南区の磐越道新潟パーキング付近の水田、④秋葉区の矢代田駅～古津駅付近の水田などであった。①、②は新潟大学五十嵐キャンパスを埒とするミヤマガラスの活動範囲に対応しており、③は関屋の海岸林を埒とする群、④は新潟市バイオリサーチセンター付近を埒とする群に対応している(図4-2)。

一方、西蒲区、南区の広大な水田地帯では意外なほどカラスの群に遭遇することは少なかった。

山本未来(2009年度新潟大学農学部卒業論文)によれば、新潟大学構内を埒とするミヤマガラスの採食地選択は埒に近い新通や中権寺付近の水田が中心で、赤塚などの遠方まで行くことは稀であったとしている。同論文では、埒を出発してから帰るまでのほとんどの時間を水田での餌の探索・採食に費やしていたことを確認し、採食行動に際してもエネルギー効率が良い近場の水田が選好されているとしている。

関屋海岸林を埒とする群は、毎朝、関新のヤマダ電機→鐘木の市民病院前といったルートを通って曾野木団地や鍋潟新田付近の水田に出かけていくことが、他の調査者によっても観察されている。

その他、秋葉区の埒入り前の集結(矢代田→古津→新潟市バイオリサーチセンター)や西蒲区の水田地帯にミヤマガラスの群がみられないこと、北区の分布状況などについても他の調査者による踏査報告と一致する傾向がみられ、図4-2は冬季におけるカラスの分布傾向を概ね反映しているものと思われる。



確認個体数

- 500以上
- 200以上～500未満
- 100以上～200未満
- 50以上～100未満
- 10以上～50未満
- 0以下

調査ルート (GPS軌跡)

図4-1 GPSによる現地確認踏査記録

